
マヌカンが吠えるとき

あゆみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マヌカンが吠えるとき

【Nコード】

N5665C

【作者名】

あゆみかん

【あらすじ】

【？/全5話】 これは、老人と人形マヌカンもしくはマネキンそして現代の物語。復讐と炎と嘘と現実と、生と死と魂と。それから……ラブ。人形とのやりとりは、『だるまさんが転んだ』でお願いします。

第1話（前書き）

マヌカンともマネキンともいいます。

ここでは過去と現代を分けたいために、両方を用いています。マヌカンの方が過去っぽいです（ただの作者的イメージ）。

それでは、どうぞ。

第1話

私は、おじいさんに作られたマヌカン。本当は、どこかから注文があつて作られたのだけれど。結局それは、必要なくなつてしまつた。

おじいさんと私は、この くたびれた店『シャルローズ』で細々と暮らしている。

おじいさんは骨董品などを引き取つたり売つたりしながら、好きな人形や洋服を作つたりしている。

私は そんな おじいさんを毎日 見守っているの。名前はロリヤ。

ああ今日も良い お天気ね おじいさん。

決して声は出ないし心も通じないけど、私は好きよ おじいさんの事が。

今日という日も一緒に ずっと過ごしましょう。

「ロリヤ。よく お聞き。重要な事だからね」

え？ ……どうしたの急に……おじいさん。

おじいさんは私の前に ただ立って、私のエメラルドの瞳を見つめる。とても、憂いを帯びた懐かしいような、温かな瞳。私は あなたの瞳が大好きよ。

「私は孫の家に行く。……店を、たたむつもりだ。しかし、ここの骨董品たちが残る。引き取ってくれる相手が見つかったから、そちらに全て引き取ってもらつつもりだ」

おじいさんが真剣な顔で淡々と説明してくれた。それが、とっても悲しかった。

「お前は」

そして残酷な一言を。

「火にかけて、処分する」

私に言った。

「許してくれ」

許さない。

許さないわ。くやしいわ。涙も出ないのね。

「ちゃんと お被いをして焼いてもらう。ロリヤ、分かってくれ。危険で、とても怖いんだ。人形が、魂を持つたなんて……」

さようなら、おじいさん。

おじいさん。おじいさん。おじいさん……。

おじいさ……！

「お前はハジか？ ここはアルプスじゃないぞ」

パコッ。

缶ペンケースで、頭を叩かれました。

浅木 直。中学二年生で、ゲーム大好き人間です。髪はショート

でバトミントン部。おてんば娘だと、母親は いつも言っています。「さて。勉強勉強。今度 居眠りしたら、スクワット百回な」

机で居眠りしていた私を起こしたのは、隣の家の高校生、鎌井寺かまいでら美十みと。男です。物知りで、頭の中に辞書が入っています。時々アホみたいにチヨコを食べますが、鼻血を出したのを見た事は今まで三回くらいしか無いです。トランプの方の『ブラックジャック』部に所属しているようです。

「人の事は いいから、先へ進め」

わかりました。ええと……。

私、浅木 直は先日、なんと学校のテストで0点を とってしまいました。名前の書き忘れとか、解答欄に書いた解答が一段ずつズレていたとか、そんな可愛いもんでないです。全力投球で、全てホームランを打たれてしまったようなものです。

「なんで15割る3が30で増えるんだ。ダメだ。お前のレベルについていけない」

さっそく、美十くんはサジを投げられてしまいました。

「底抜けのアホ」

そして、そのサジは私に刺さりました。ぐさっ。

美十くんは昨日から、私に夕方以降こうして勉強を見てくれます。母親が本当に美十くんは すがって お願ひしたようです。どうかウチの娘を お救いください、アーメン、と。

「仕方ない……小学生に戻ろう。小学生の教科書って、捨てずにとつてあるか？ 今すぐ出せるか？」

と、美十くんがヤレヤレとタメ息交じりに聞きました。

「あるよ。押入れに……たぶん」

私は押入れを勢いよく開けます。すると。

「ぎゃあああああああああッッッ!!」

!

「？」

……醜い声を上げたのは、驚いた美十くんです。

あれ？

私はキョトンと、押入れの中のソレを見つめました。

真っ裸のマネキンが一体。しかも上段で こちらを向いて正座しています。

足が曲がるんだ？ このマネキン……。

「何でマネキンが ここにいるんだろ……？」

と、私は首を傾げました。振り返ると、美十くんが いません。

あ、いた……。ドアの向こうに避難して隙間から、私たちを見えています。

「何でいるんだよっ、そんなもんがっ」

叫んでいます。非常に怯えています。困ったな。このままじゃ、教科書が探せない……。

「ちよつと どいてくれませんか？ 探したいものがあつて……」

とりあえず、マネキンに頼んでみました。でもやつぱり無反応。当たり前か……。

「どうしよう。美十くん。重そうだから、一人じゃどかせられないよ。手伝って」

「もういい！ 明日、俺の教科書 持ってくるから！ 俺を からかうのもいい加減にしろ！ 今日ば もう帰る……！」

と、とつとと荷物を まとめて美十くんは帰ってしまいました。

……別に からかってなんかいないのに……。

私がシユンとしていると、ガタツと音が思いもよらぬ方向でしました。私の机。「あれ？」

私の机に向かつて、何かを まるで「書いている」ポーズで静止しています。一体いつの間に押入れからの移動を？ ……

私が机の上を覗き込むと、字が書いてありました。

『私はロリヤ。意志を持っています』

と、一文。私はパチクリ？ として、「……はあ？ そうなんですか……」と、空を見上げます。

あれ？ ロリヤって、さっき夢の中で……。

そして再び視線を紙の上に戻すと。続きが書き足されていましたが、でも体はピタツと停止しています。

『おじいさんを探しているのです』

おじいさん……。さっきの夢の あなたを燃やすと言っていた、その おじいさん？

試しに、後ろを向いて ある程度の時間を置いた後、再度 紙の上に視線を向けると。

やっぱり続きが だんだん書き足されていっていましたが、間違いない。まるで「だるまさんが転んだ」です。私の見ていない所で、このロリヤさんは「動いて」いるのです。

結局、ロリヤさんは以下のように書いていきました。

『私を火あぶりにして燃やした、あんのクソジジイを恨んでいます。』

といっても、昔の事で、しかもイギリス。もう生きていないでしょう……。ならば……。生まれ変わった おじいさんを見つけ出し、同じ目に合わせてやるわ。

火をつけて、燃やしてやるっ！！
………」

……最後だけは、殴り書きでした。すごい執念です。うわぁ……。

「でも どうやって？ 手がかりは、あるんですか？？」
と、私はロリヤさんに聞きました。 シーーン……。

あ、そうね。見てたら動けないんでしたね。

私はポリポリと頭をかきながら、そつと部屋を出ました。「トイレ、行ってくる」

そして戻ってきてみると、ロリヤさんの姿は消えていました。もちろん、押入れの中も。家の中のどこにも。探してみたけど、見当たりませんでした。

一体、どこに消えてしまったのでしょうか……。

残ったのは、一通の置き手紙だけ。また、机の上に置いてあったのですが……。

『この周辺に魂の気配を感じる。探してみせるわ』

……この周辺に。逃げてください、おじいさん。

《第2話へ続く》

ペシペシ。

……美十くん、モノサシで私の頭を叩かないでください……。

……

数日が過ぎました。もうすぐ二学期の期末テストです。すっかり秋らしく、野原が あればコオロギや鈴虫の気配を感じます。

あれからずっと、ほぼ毎日くらい美十くんにシゴかれています。

おかげで、中学生の頭に戻って来れた？ ……はずです。

今日も、これから お勉強会っ。

「楽しそうだよね、直、つて。もしかしてさあ……」「えっ？」

「うーん。何でもない。頑張つてえ〜〜！」

教室からの出かけに、仲の良い友達が何やら不思議な事を言います。何なんでしょう???

私は家への帰路を急ぎます。商店街を抜けて、道路の横の歩道を走ります。時々、自転車にぶつかりそうになりながら……。

「あっ」

歩道の対向側に、美十くんの姿が見えました。

まだ、高校の制服のままです。でも………。

「……？ ……何で家と逆方向に歩いているんだろっ？ 家、あっちなのに……」

と、不思議に思っつて美十くんを目で追います。よく見ると。

美十くんは、一人で歩いているわけではないのです。お連れさんがいました。

髪が長いストレートヘアの、女の人です。美十くんの学校の制服を着ています。二人で、談笑して歩いています。

美十くんが、楽しそうに笑っています……。あんな顔、初めて見ました。

何だかショックです……。まるで、美十くんが知らない人みたい……。

私が下を向いて歩いていると、ドンと何かにぶつかりました。思わず、「ごめんなさ……。」と言って前を見て、心臓が止まりそうな程 驚きました。

なんと、ロリヤさんが突っ立っていたのです。青のワンピースと白い帽子を かぶって。

私よりも何十センチも背の高いロリヤさん。もちろん、動きません。

「ど、どうしてここに……？」

鳥肌が立ちました。変ですが、今さらロリヤさんを不気味に思えてしまったのです。

エメラルドのロリヤさんの瞳が、何だか激しく燃えているような気がします。

……どうしよう……怖い……。
助けて、美十くん……。

私は走って家とは逆方向に逃げました。数十メートル走った後に後ろを振り返ると、ロリヤさんは静止していますが さっきの場所

よりも こっちに近づいています！

私を追いかけているんだ！！

どうしよう！！ 怖い！！

逃げるしかありません。私は走り続けました。そして美十くんに助けを、と閃き、横断歩道を渡りかけました。

しかし不覚です。

私は、交差点を曲がってきたバイクに、衝突してしまったのです。

……。

……………

……

目が覚めると、病室でした。お母さんと美十くんが、私の顔を覗きこんでいました。

どれくらい眠っていたのでしょうか。辺りは静かすぎて、わかりません。

そして体が動きません……。

「動くな。麻酔が まだ効いているんだろう。足と腕、骨折と打撲だし。大丈夫だよ。ここは病院だから。お前はバイクに当たって、ちよっと吹っ飛んだわけ。覚えてるか？」

と、横にいるらしい美十くんの声が教えてくれました。

「う、ん……」

声が うまく発音できません。

「ああ良かった。まったく もう、心配かけて。信号は青でも、ちゃんと左右確認しなさいっ」

お母さんが、泣きそうに怒っています。……ごめんなさい、お母

さん。

「まさか勉強ノイローゼじゃあるまいな？ 安心しろよ。しばらく勉強は お休み」

……いえ。ノイローゼで ないです。美十くん。

その後、お医者さんが来て私の様子を うかがった後、入院などの手続きの説明をし終えて みんな去って行きました。ここに残ったのは、私と美十くんだけです。

「……で、聞くけど。ロリヤさんが、どうした？」

美十くんがベッドの横に座り直して、私の顔を うかがいました。「お前 運ばれる時に うわ言で言ってたんだってさ。ロリヤさんが来る……って。俺にしか分からない話だからな。たぶん おばさんに言っても信じてくれないだろーし。俺だって半信半疑の段階だ。お前の作り話かもしれないし」

う……。私、嘘ついてないよあ……。

「そんな悲しそうな顔すんな。一応、信じたいつものりの方なんだよ。例えば、お前が見せてくれたロリヤ直筆の手紙。確かに、お前の字とは筆跡が明らかに違いすぎる。美しい！」

あうう……。すみません、字が汚くて。

「おかしい話だ。イギリスから来たと思っていたのだが、手紙が日本語だとは」

え？

「どついつ経緯で日本に渡ってきたのか知らないが、ロリヤは日本語も理解できるし、字も書ける、という事だ。……いや、ひよつとしたら、その おじいさんとか言っている老人……日本人だったのかもしれないな。だとしたら」

腕組みをして、美十くんは考えを まとめます。

「その おじいさんの子孫が……日本にいるのかも。孫の所へ、つて夢の話だけど、言っていたんだらう？」

チラツと私を見ました。

私は とても感心しきつた目で美十くんを見ていました。すごいなあ、さすが美十くん！ そんな事まで分かるなんて！！

「ロリヤは必ず ここに来る」

ぎくり。

「安心しろ。おばさんが、今日は ここに泊まるって言ってたから。側にはナースコールもあるわけで。俺も明日は学校に行く前と、授業が終わってから来るつもりだ。ちょっと調べものもしてくる」

う、うん……。

「これを渡しておくから」

と、私の動かない手に握らせてくれたのは、赤い小さい きんちやく袋。

「ただの お守り。気休めだけだ」

嬉しい……。ありがとう！

「あとアドバイス。もし、ロリヤに襲われそうになったら」
ベッドから数歩、遠ざかって また私の方を振り返ります。

「とにかく、ロリヤから目を離すな。奴は……見ていると、動けな
いんだろっ?」

《第3話へ続く》

第3話

消灯時間が過ぎました。私のいる病室では、お母さんが隣のベッドで眠っています。

病室は個室から大部屋へ移り、他の人もスヤスヤと眠っています。人が何人が居るので安心はしているつもりなのですが、全っ然眠れません。困りました。

おかげで、色々と考えてしまいます。

私、初めてロリヤさんを見た時は全然 怖くなかったのに。どうして次に会った時には すごく怖かったのでしょうか。

いや、逆だ。どうして最初、怖くなかったのだらうと。ふと、考えます。

私、ロリヤさんを知っているのではないのか？

……知っている？ ……なぜ。

思い出せ……私と人形。 ……人形？ ……マネキン……………？

……ああ そういえば。私が小っちゃい頃……よく遊んでいたお人形って。確かマリアとかいう手作りのものでした。誰かが作った、手作りの お人形……。誰が……？

……おじいちゃん？ ……

妙に確信しました。もう、だいぶ前に死んでしまったけれど、本当に本当に微かな記憶の中で覚えがあります。

私が話しかけると、おじいちゃんは いつもニコニコと相手をしてくれていました。そして、いつも何かの やりかけの途中でした。

あの時も。

私が「何してるの？」と尋ねると、「人形を作っているんだよ」と。

人形に限らず、物作りが好きな、おじいちゃん。

偶然でしょうか……。

ふと、何か物音がした気がして、目を開けてみました。

ヒタ、ヒタ、ヒタ……ピチャン。パシャ、パシャ……。

水のような音です。そして何か臭います。

……激しく、嫌な予感がします……。

私は体を ゆっくりと起こしました。もう動けます、何とか。そして暗い中、部屋の入り口付近をじーっと目を凝らして見えます。何かチラチラと、影が動いているような。そして……？床には。ドアの隙間から、水が。流れて入ってきています。

「……………！！」

分かりました！ あれは……灯油です！！ 灯油の臭いです！！

私は慌てて、ナースコールのボタンを押しました。すぐに看護師さんが来てくれました。

やはり灯油。誰かが一斗缶を持ってきて、そのまま倒して置いたらしいです。幸い、火は つけられませんでした。

犯人不明ですが、分かっています。

ロリヤさん。

……

「これで はっきりしたな。ロリヤは確実に、お前に殺意を抱いている」

美十くんの話聞いて、ますます怖くなりました。どうして。なぜ。

「私が おじいさんの孫だから……？」

私のポツリと言った言葉が、美十くんの顔色を変えました。「知っていたのか？」

私こそ、え、と美十くんの方を見ました。

「一晩かけて調べてきたんだよ。俺のトコのアルバムとか引つ張り出して、お前ん家の家族と撮った写真を探して。あったよ、何枚か。お前の おじいさんが写っているの」

と、手渡された三枚の写真。美十くん家にもあったんだ。私も探せば、きつとあると思います。

「で、ウチの母親にも聞いたり、おじいさんの名前で色々と検索してみたり。何か行き着けばラッキーかな？ っていう軽い気持ちで、探してみたわけ。どうせ夜だから外には行けねーし。できる範囲で、調べてみたわけ」

今、病室を移り夜とは違う病室です。朝に なったら、言っていた通り美十くんが来てくれました。学校は昼から行くそうです。

灯油事件の事を聞いた美十くんは本当に私の事を心配してくれていました。何から何まで、美十くんに感謝と申しわけなさでいっぱいです。

「直の おばちゃんにも聞いた。思った通りだ。お前の おじいさんは昔、古物の取り扱いをしている、その道じゃ結構 名のある人

形作りの技師だったらしい。日本からイギリスへ、晩年は娘夫婦のいる日本へ。イギリスにいる間は、骨董屋だった。……お前が夢で見たのと一致する。お前は、おじいさん……鳩見 藤二郎の孫だ」

鳩見 藤二郎……そんな名前だったっけ……だった気がします。

「ロリヤにしてみたたら憎いだろう。おじいさんは自分より孫のいる家をとったんだ。自分は燃やされて……されて？」

と、美十くんの動きが止まりました。

「燃やされて……ない、よ、な……？ あれ……？」

「ロリヤさんは火あぶりにされて……って言ってたよ？ やっぱり燃えてるんだ？」

「イギリスで燃やされている……？ じゃあ、今まで見てきたやつは、何だったんだ」

何かが おかしい。

私たちは そう思いました。そして、美十くんが真剣な目で私を見ます。

うおっ……、私、とてもドキドキしています。

「……変な顔」

ひどいです……。ぐっすん。

「とりあえず、絶っつ対に一人には なるなよ。俺は これから学校に行く。分かったな？」

そして。

いきなりですが、今 病室に一人です。

大部屋ですが、他の患者さんは一人しか おらず、その患者さんも今どこかに行ってしまうました。お母さんも いったん家へ帰っ

てしまい……。

せつかく忠告してくれた美十くんに申しわけないです。

「昼間だし、大丈夫よね……」

と、自分に言い聞かせます。そして窓を見ました。

空気が固まりました。

窓に……逆さまになったロリヤさんが、へばりついています。上半身だけ、見えます。

そんな格好では、頭に血が昇……らないか？ 人形だし。

スパイダーガール？

真っ直ぐ、私だけを見ています。そして何かを訴えかけているよ
うな、そんな視線。私も、ロリヤさんに釘づけです……。

ごくりと、つばを飲み込みます。逃げてはいけない……逃げても、
また追いかけてくるだけ……。

私は決心しました。そして、目を閉じる。数秒待つ。

手には、美十くんがくれた お守りを握りしめて。

音が聞こえます。ガラガラ……窓を開ける音。ヒタヒタ……近づ
いてくる音……。

ヒタ……。

足音が止まりました。私は、目を開けます。

いない。

誰も、いませんでした。

「どうして……？」私がベッドから下りようとすると、ヒラリと封
筒が一通、床に落ちました。拾い上げます。

「ロリヤさんから……」

私は、すぐに開けて読みます。
一体、何が書かれているのか。気になって仕方ありませんでした。

《第4話へ続く》

第4話

『おじいさんに会いたい』

おじいさんに会いたい

会いたい

会わせる

でなければ お前を×××

「無茶な！ 強引だ！ どうやって死んだ人に会わせるってんだ！？」

興奮する美十くん。それはそうだと私も思います。飲むヨーグルトを持つ美十くんの手が、ワナワナと震えています。ああ、そんなに力を込めたら、ストローからヨーグルトが。

「結局、おじいさんとやらは見つからなかったって事だろ。そりゃそうだ。日本人は何百何千何万何億人いると思っっているんだ。おじいさんの魂の気配？ はは！ そりゃすごいね。俺にや、わからない」

私にも分かりませんが。美十くんにも分からないものを、私なんか分かるはずもないです。

「とにかく……。俺、ロリヤさんと話つけてみるよ」

「え？ どうやって？」

「手紙を書く。今度会ったら、それを渡せ」

手紙を。うーん、うまくいくかな。

「今から書いてやる」

美十くんが書いて、私に渡された手紙。読んではいませんが、内容は“説得文”らしいです。おじいさんはとつくに死んで、もうこの世にいない、孫の私には関係がない、おじいさんの魂を見つければ俺らの手では無理だ、あきらめて帰ってくれ……的な内容らしいです。

私はベッドの枕元に置いて寝るようにしました。寝ている間に来るかもしれませんが……。

ある日、目を覚ますと。ロリヤさんの返事が書かれたメモがありました。

『私の夢を叶えて。……』

「夢？」

私は首を傾げました。

『あなたの体を貸して……そして あなたの彼と、デートさせて』

……

「何だ？ 彼って、俺の事か？？」

「だと、思っけど……」

話が思わぬ方向に展開してきたので、どう考えていいのか分かりません。

ちよくちよく、学校の授業が終わってから美十くんは、こうして病院まで毎日 足を運んで来てくれます。ただ そろそろ、勉強を再開しようか？ という話も……。

「何で俺だ！ ……まあ、いいけど？ それで気が済む話なら。じ

「や、直が退院した次の休みぐらいでいいかな」

腕を組んで、私を見ます。

「え、うん。私は いいけど。体を貸すって、どうやるのかなあ。私の意志、どこ行っちゃうんだろ」

「ちよっと不安……なのですが。」

「まあ、話せば分かる奴みたいだし。俺が何とかしてやるよ」

「うん……！」

少し、気が軽くなりました。美十くんの言葉は、とても私に良い薬です。

美十くとデート。……あれえ、何だかウキウキしてきました。なんでだろう。

ロリヤさんに また手紙で返事を告げると、『承知』と次の日に返事が返ってきました。

承知、つて……武士??

休みの日。私は、ちよっと いつもより気合いを入れてメイクと、流行りの服を着て出かけて行きました。

相手は高校生です。子供に扱われたくない。ちよっと そんな風に思いました。

でも実際 美十くと待ち合わせの公園で会うと、美十くんは私の外見には全く触れずで……なので、ちよっぴりガツカリです。

「ロリヤさんは、まだかな……」

「ああ、目をつぶってみるよ。でないと、動けないんじゃないか」
美十くんに言われて、私は目を閉じます。そうしたら。

スポン。

……??

んん？

……何かが、飛び跳ねたような音がしました。びっくりして目を開けると、足元に美十くんが見えます。そして何と、その美十くんの隣にいるのは私？ の姿……。

えっ、私は ここにいるのに。どどういう事?? どうしてここに私がいるの?? 美十くと……。

「……お前、ロリヤ、か……?」

「ええ。そうよ。やっと会えたのね。おじいさん」

おじいさん？

「どどういう事だ。俺は おじいさんなんかじゃない。直を どうした?」

美十くんの顔が強張ります。私……の姿のロリヤさんは ちっとも ひるみません。と、いう事は私、ひょっとして今……ユーレイなんでしょうか??

「あの子は しばらく体から離れていてもらう。私の気の済むまでね。行きますよ、おじいさん」

ロリヤさんが、美十さんに しがみつきます。きゃあつ。

「だから俺は」

「思い出すわ。そのうちに きつと。イギリスで過ごした私との日々。あなたは おじいさんの生まれ変わり。私には分かるの。だつて……」

ロリヤさんが美十くんを見つめます。

「行こっ!」

と、ロリヤさんは美十くんを引つ張つて、ずんずんと歩いて行きま
した。

こつしちゃんいられません。私も、後を追っかけます。空中を走り
ながら。

《第5話へ続く》

第5話

二人の頭上から、様子を見守っていました。

二人は何の変哲もない普通のカップルに見えます。美十くんと、私。私、は、とても楽しそうに よく笑っています。

街の中を歩きながらショーウィンドウを眺めたり、時々、お店の中に入ったり。「私」は店に並べられた服や玩具や食べ物に、何でも興味津々です。そして、美十くんにアイスクリームを買ってもらったりしています。

そのうち、西都タワーに着きました。展望階へ上がって行きます。着くとちょうど、時刻は夕日が沈む頃。二人は窓の景色に向きながら、しばらく黙っていました。二人の顔と周囲を、夕日の赤い光線が包みます。

とても突き刺さるような赤。なぜでしょう。なぜ二人は黙っているのでしょうか……？ 私は遠くの景色より、二人の行動の方が気になります。

「行こうか」「そうね」

と……まるで何の ためらいもなく、二人はエレベーターに乗り込み降りて行きました。

え？ それで終わり？ 何だか、あっけないな……私は、そんな風に感じました。

二人は、外へ出ます。

タワーの周囲にある、新緑公園へ入りました。よくカップルが訪れるスポットです。現に今の時間帯にはホラもう、何組かのカップルらしき人たちが。

そんな人たちの事より、二人です。

二人とも、あんまりしゃべってないような気がしました。どうしたんでしょう、昼間はあんなにしゃいでいたロリヤさんなのに、すごくおとなしくしています。

「疲れたんでしょうか？ ……私の体、体力ないせいでしょうか…
…とか。」

湾岸沿いに出ました。船が見えます。もう辺りは暗くなって、遠くの照明が星のようになってきました。

静かです……。

「もう、十分なのか」

美十くんが、重そうな口を開きました。「ええ……。でも、このまま……」

ロリヤさんは ゆっくりと湾の景色から美十くんの方へ顔を向けます。

「おじいさんと一緒に いたい。ずっと。あの子には、悪いけど」
え？

「この体、返したくない。あなたと、この身尽きるまで。一緒にいるわ」

「ちょっと、ちょっと ちょっと？」

「許して。おじいさん。私を燃やした、あなた。私を……」

燃やした！ あなた！！！！」

ロリヤさんと私の叫びと、美十くんの怒鳴り声と……美十くんがパーでロリヤさんの頬を叩きました。

一瞬、私が美十くんに叩かれたのかと思いました。叩かれたのはもちろんロリヤさんの体です。

ポカンとしている私と、叩かれたままに視線を向けたままのロリヤさん。

私も、痛い……。

「おじいさんとやらが なぜ日本へ お前を連れて行かなかったのか。その苦しさが、お前には分かるのかよ！」

美十くんが続けます。

「おじいさんはな！ 自分の死期が もう間近だという事を悟っていたんだ。証拠に、日本に来てすぐ、おじいさんは亡くなっている。日本に いた時間は、ほんの わずかしが無かったんだ！」

そうだ……美十くんの言う通りだ。私の小さい頃に おじいさんは亡くなっている。一緒に過ごしたのは、ほんの数年だけ。たった数年だけなんだ。

おじいさんは、自分が もう長くないのを知っていた。

「いいか。おじいさんは生に限りある人間で、お前は死ぬ事のない人形。違うんだ。分かってくれよ……。おじいさんだって……。あんと一緒に、生きたかったんだ」

……美十くん……。

「自分の死ぬ所を見せたくなかったんだ……。あんたに。あんたにはあんたの、人形としての道を行ってほしかったんだ。だから……」

……美十くん、泣かないで……。

「燃やさなかつたんだ。いや、燃やせなかつた。」

だから、あんたはここにいる。人形の体で、日本へ渡って来た。

燃やされた、と言ったのは、あんたの嘘だ」

.....。

シン.....。

風も、止んでしまった。

もう、誰も動かない。

偽りは全て溶けてしまった。美十くんにも全て見破られてしまった。

真実は一つ。おじいさんはロリヤさんを捨てた。

ロリヤさんは おじいさんを探した。

見つけたのは おじいさんでなく、ただの孫。孫には何の罪も無い。

本当は灯油に 火 を つけたかった。

おじいさんのように.....。

『人形が魂を持つたなんて.....』

おじいさんの言葉。

『許してくれ』

許さない。

許さないわ。くやしいわ。涙も……。

「……この体は 涙が出るし痛みも感じるのね。……これが人間なのね」

驚く。私も美十くんも。

ロリヤさんの両目から、涙が宝石のように零れ出ていました。そう、宝石のように光輝いて。

まるで それはエメラルドの輝き。ロリヤさんの瞳。

涙が、こんなにも美しいものだったなんて……驚きです。

手で何度も何度も涙を払おうと、また、叩かれた頬を さすりながら。

とても人形とは思えない仕草でした。

「ごめんな……。ハンカチ持ってなくて」

美十くんが申しわけなさそうにロリヤさんを見下ろしています。

「いいの。泣きたいから……。それと、本当に最後の お願いだけ、聞いてもらえるかしら。あなたたち二人に」

「? ……何」

「おじいさんが出来なかった事。私を燃やして。お被いは しなくもいいわ。できるものなのか分からないけど、魂を……人形の体ごと燃やして」

そしてロリヤさんは倒れてしまいました。

同時に、私（魂）が私の体にスポットと……。

元に戻りました。ロリヤさんの魂が、元あるべき所に戻ったのでした。

どこに行ってしまったのかな……でも きっと願いを叶えに来ると思います。

「直」

美十くんの呼びかけに、私は目を覚ましました。上半身を起こさ
れて、美十くんの腕の中にいます。

ん？

腕の中???

「あー良かったー!!」

美十くんの、安心しきった声が　すぐ耳近くです。ちょ、ちょっ
と近すぎですコレは???

「ロリヤの野郎、直を返さなかったら……俺が燃やしてやるうかと
思ったぜ」

……えーっと、私の体が燃やされるって事??　美十くん、変で
す?　いつもの理路整然らしくありません。

「おい。直。何か　しゃべれ」

「おっ……、あ、はい?　生きてまーす??　……」

しゃべりました。それが美十くんに笑顔を　もたらしたようです。
いつか見た、美十くんの笑顔。私にも、してくれたんですね。

私は、しばらくギューツと美十くんに抱きしめられていました。
熱いです。

今夜はホット・ナイトです。

……

数日後。無事テストも終わって、赤点は免れたものの。私の家で

勉強会は続きます。私の部屋で、今日は英語を教えてくださいます。

「お前が百点満点とれるまで、ずっと来る」

……だ、そうです。永遠に無理なんでないかなあ……。

ちなみに。私と美十くんは、お付き合いをする事となりました。

「でも美十くんって。本当に おじいさんの生まれ変わりなの？」

「知らん。ロリヤのホラだ。そう思っとけ」

……何て冷たい答え……。ロリヤさんが気の毒に思えてきました。

「ロリヤさん、どこにいるんだろっね。燃やすにも……」

今だに、行方が分かりません。音沙汰なしなのです……。

「案外、近くに いたりしてな」

二人で そんな他愛のない会話をしていましたが……。ピタリと、お互いの動きが止まりました。

……そして、ガバツ！！ っと振り返ります。私たち二人とも同時です。

目線の先に あるのは押入れ。押入れです。

「まさか……」

案外、近くに いたりして。

近くに……。

……さあ、開けてみましょうか。

»
E
»
D
»

第5話（後書き）

【あとがき】

マネキンの技師の方の仕事をTVで観ました。

すごく面白そうに見えてしまった。私にもやらせてほしい……。

ご意見・ご感想ありましたら、お願いします。

本作品は、読者様のご指摘により加筆・修正をしています。)

H19.11.6.)

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5665c/>

マヌカンが吠えるとき

2010年10月22日00時29分発行